HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	植民地建築の保存活用と観光 ： 韓国の大邱市を事例として
Author(s)	白, 承愛
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第17013号
Issue Date	2026-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k17013
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/100066
Type	doctoral thesis
File Information	BAEK_Seungae_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）　　氏名：白　承愛

審査委員　　主　査　　教　授　　田　中　英　資
副　査　　教　授　　山　村　高　淑
副　査　　准教授　　田　代　亜　紀　子

学位論文題名
植民地建築の保存活用と観光－韓国の大邱市を事例として

本論文は、韓国社会において植民地建築が「負の遺産」として扱われてきた歴史的背景を踏まえつつ、近年のニュートロ文化の拡散の中で、大邱・北城路の植民地建築が歴史的文脈から切り離され、イメージや体験として消費される現象に着目する。そして、これらの建築が観光の文脈においていかに観光資源化され、消費されていくのか、その過程を明らかにすることを目的とする。従来の研究が国家主導の遺産政策や「負の遺産」という枠組みに依拠してきたのに対し、本研究は地域における実践、空間経験、消費過程に注目し、植民地建築の意味形成をミクロな視点から分析する点に特徴がある。

序章では研究背景と課題を述べたうえで、先行研究を整理することで本研究の位置づけを示した。また、集合的記憶や場所論、ノスタルジア理論を基に分析枠組みを提示した。特にノスタルジアを現在の感覚的経験と結びついた集合的感受性として捉え、「共感的ノスタルジア」という視点を提起した。第 1 章では韓国における「近代」の歴史認識を検討し、日本との比較を通じて近代文化遺産、近代化文化遺産にみる「近代」の意味づけの両国における差異を明らかにした。第 2 章では文化遺産政策と観光の関係を分析し、2000 年代以降、韓国において近代建築が観光や地域再生と結びつきながら活用されてきた過程を示した。第 3 章では北城路の事例を取り上げ、植民地建築が商業・産業空間として継続利用されつつ、改修や用途転換を経て観光資源へと変化していく過程を検討した。その結果、植民地建築の意味は制度的指定ではなく、地域での利用や経験の蓄積の中で再構成されてきたことが明らかとなった。第 4 章では MZ 世代とニュートロ文化に注目し、SNS を通じたイメージ消費や体験共有によって、植民地建築が新たな記憶とノスタルジアを生み出す空間として再解釈されていることを大邱・北城路の事例を通して示した。終章では、植民地建築が固定的な歴史的意味にとどまらず、現代の文化実践や感覚的経験の中で動的に再構成される存在であることを確認した。また、「共感的ノスタルジア」は、過去を直接経験していない世代における過去志向的感受性の形成を説明する有効な概念であることを示した。

質疑応答では、以下の点が問われた。本論文が、記憶論、遺産論、メディア論における消費論としても読めることを前提として、表題となっている保存活用論としてはどのように位置づけられるのか、また、近代遺産、近代化遺産において戦争遺産をどのように捉えるか。この点は、読み手によっては観光が「歴史修正主義」を増幅されるのでは、と批判がでてくる。歴史

的意味が希薄化していく現象を観光が増幅する、という指摘もあると思うが、これについてはどう考えるか。遺産研究の先行研究については、遺産を関係論的に捉える議論について十分に踏まえられていないと思われるが、論じられている現象を観光、遺産などとしてどのように位置づけ、理解するべきなのか。大邱という町をとらえた時に、宗主国としての日本と韓国という二か国関係だけではない他民族の存在についてはどう捉えるべきか、また、本論文により新たに提示された「共感的ノスタルジア」の共感される要素とは何か、という質問がされた。

これら質問に対しては、本論文の限界をとらえつつ真摯な回答が得られた。これら回答をふまえた上で、審査委員会では、本論文を、植民地建築を対象として、植民地宗主国との関係性においてそれらをどのように保存活用するのか、そこに観光がどのように関わっているのか、韓国の大邱を事例とした実証をおこなった論文として高く評価した。植民地建築がその保存の過程で、一元的に還元されるのではなく、様々なイメージ共有のなかで植民地建築が残されていく、という過程を明らかにしている点、そこで観光のリアリティがつくられていく、という独自性を評価し、植民地建築を「負の遺産」として捉えるのではなく、ローカルな中での実践でとらえていく点が本論文による新たな学術的貢献とされた。結果として、本審査委員会では、概念整理や理論的視座の議論の弱さが認められるものの、本論文が博士（観光学）としての学位授与の基準には達していると判断し、合格とした。

以上